平成３０年度第１回生物多様性保全検討部会

【　摘　　録　】

日　時：平成３０年7月１８日　１３：００～１５：００

場　所：コープイン京都　２階　２０２号室

出席者

委　員：①板倉豊委員，②喜馬爽委員，③畠佐代子委員，④原口真委員，⑤久山喜久雄委員，
⑥森本幸裕委員，⑦湯本貴和委員

議　題：⑴　京都市生物多様性プランに基づくリーディング事業の取組状況等について
⑵　その他

＜開　会＞

中村環境技術担当部長からあいさつ

議題⑴　京都市生物多様性プランに基づくリーディング事業の取組状況等について

畠　委　員　「京の生きものホットスポット調査」のデータはいつ頃公表する予定か？

事　務　局　現在，生きものの調査をしている様々な団体に協力を依頼し，調査結果を御提供いただき，取りまとめている。京都市内のデータベースとして形にするにはもう少し時間が必要である。平成 32 年度までには公表し，部会でも御覧いただき，それを元に検討していただけるようにしたい。

原 口 委 員　平成 29 年度の部会で，SNS の活用について議論があったが， Twitter，Facebook の活用が進んでおり，ポータルサイトの利用者も増加しているとのことで，少し安心している。しかし，次期プランに向けて，周知させる仕組みを捻るべきである。接点のない人にどう周知するかが次期プランの重要な論点である。
現状，ウェブサイトや SNS の取組をしてきた感触はどうか。

事　務　局　Facebook，Twitter については過去に開設したアカウントを活用できていなかったため，今年度から改めて更新している。１つの投稿に対して Facebook は 300～400，Twitter は 1200～1500 の閲覧があり，効果は大きいと考えている。

湯本部会長　SNS に関しては，もう一息ブレイクスルーが必要という印象である。ある種の臨界点を越えていない。

原 口 委 員　発信力，影響力のある人に積極的にフォローしてもらう作戦も必要である。

久 山 委 員　「京の生きものホットスポット調査」で，大学生による生きものの発見報告は，いつ頃から始まり，どのような状況か？

事　務　局　平成 27 年度に開始した。大学生に学内の生きものを携帯等で写真を撮って本市が委託する業者に送ってもらい，委託先が名前を調べたうえで，データベース化を行っている。大学によっては，取りまとめたうえで，提供していただいている。

森 本 委 員　大学でのホットスポット調査は，私も協力して取り組んでいるが，成功していないのではないか。意義が分からないというのが問題である。素人が適当に写真を撮って送るだけでは限界がある。現実問題として見直すべきではないか。何を見るためにどこをどうモニタリングするのかをはっきりさせるべきである。

板 倉 委 員　大学のホットスポット調査は，私も協力して取り組んでいるが，協力者にかなり負担がかかっており，継続するには組織的に大学が受け入れるシステムが必要である。意義としても問題があると思う。

湯本部会長　現在，SNS を活用したシチズン・サイエンス（市民参加型の科学）が広がっている。次期プランにどう入れ込むかを考える必要がある。一般市民が身近なところで発見できるコケやキノコなどは，シチズン・サイエンスに利用できるのではないか。

森 本 委 員　「生物多様性保全上重要な里地里山 500」に選定されている大原野森林公園は，森の案内人のボランタリーな努力なくして自然は守られていない状況である。今後，その地域で問題となっているシカをどうするかも含め，本格的に取り組むフィールドとして考えた方が良いのではないか。
また，「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」は，成功している取組だとは思うが，希少種の系統保存に限られていること，認定後のフォローアップができていないことが問題である。フォローアップを行い，さらなる展開が必要である。

湯本部会長　森本委員の発言は重要で，認定しただけになるのではなく，状況を報告してもらい，うまくいかないなら，なぜうまくいかないのかなど，フォローアップすべきである。

喜 馬 委 員　生きもの発見報告はどのように掲載されるのか？報告数は？

事　務　局　生きもの発見報告は，市民が見つけた生きものの写真，名前，場所などを投稿してもらうものである。報告されたものはポータルサイトで御覧いただける。報告数は 29 年度末時点で約 4500 件程度である。

喜 馬 委 員　生きもの発見報告と，ホットスポット調査をつなげられないか？

事　務　局　現在のところ，別のものとなっている。生きもの発見報告も，ホットスポット調査のデータの一部として活用したいと考えているが，具体的にどのようにしていくかは今後検討したい。

湯本部会長　投稿を促進するためには，投稿者への直接のフィードバックが必要である。

喜 馬 委 員　生きもの発見報告については，投稿する意義や目的が分からない。最近は，投稿に対する評価がほしい人が多いと思う。専門家に評価されることや，発見報告を行った人同士が交流できると良いのではないか。

湯本部会長　SNS は物質的なメリットではなく，適切なレスポンスというフィードバックがあれば，また投稿したいと思うような仕組みになっている。爆発的に広がらない理由は，フィードバックがないことだと思う。Facebook が爆発的に広がるのは，そのようなフィードバックのメカニズムが備わっているからである。フィードバックが全く足りていないと感じる。SNS を活かせていない。

原 口 委 員　SNS で，専門家と一般市民が交流できると良い。一般市民の投稿に，専門家から解説などのコメントがつくだけでも，一般市民はうれしいと思う。初めは湯本部会長がツイートするなどすれば，一般の人は有名人からコメントが付くことが楽しく，次は観察会に参加してみよう，などの循環が生まれる。自動的に参加者が増えていく仕組みを作るためにはどうすればいいかを考えるべきである。

畠　委　員　「京都市生物多様性保全活動登録制度」について，登録する側にメリットがないと登録に至らないと思う。登録に対するフィードバックがあれば良いのではないか。登録団体のイベントをスタンプラリー形式にするなどすれば，登録する意義ができ，登録団体の横のつながりもでき，ポータルサイトを見る人も増えるのではないか。

事　務　局　御指摘のとおり，登録制度については，登録数があまり増えていないことが物語っているとおり，制度自体に改善点があると考える。御提案いただいたことなど，登録したくなる仕掛けづくりが必要であると考える。今後，各委員から意見をいただいて，検討したい。

湯本部会長　臨界点を越えると勝手に進んでいくので，臨界点までどのように持っていくかを考えるべきである。

議題⑵　その他

湯本部会長　「京都市生物多様性プラン」では，2020（平成 32）年度までに達成すべきこととして，次の３点を掲げている。
①　京都の暮らしや文化を支える生態系や生きものが守られている
②　市民や事業者等が生物多様性の恵みを理解し，行動を始めている
③　生物多様性の恵みを生かした持続的な暮らしや経済活動が行われている
①，②については，次期プランに向けて数量的な評価を行う必要がある。次期プランをにらんで，今年度，来年度に何をしていくべきかを議論していくため，資料４の説明をお願いしたい。

事　務　局　　＜　資料４について説明　＞

湯本部会長　国土交通省が平成 28 年 11 月に出している，「都市における生物多様性指標（簡易版）」が，客観的指標の一つになりうると思う。「指標４：動植物の状況」は，独自の調査が必要である。
調査には，ホットスポット調査と，広域での指標動物を用いた調査がある。広域での指標動物を用いた調査のような取組は，すべてコンサルタント業者に委託するのではなく，市民参加，シチズン・サイエンスで行うことが必要である。ツバメやホタルの調査を，小学校と一緒にやるのは良いと思う。

森 本 委 員　湯本部会長の発言は重要である。「都市の生物多様性指標」は，精緻化を図ればとても大変だが，簡単にやろうと思えば簡単にできる。
生物調査には，拠点を定めた精緻な調査と，市民を巻き込んだ指標性の高い調査があるが，後者の指標動物として，ハグロトンボはどうか。水と緑がセットになっているところには必ず生息している。水と緑はヒートアイランド現象の緩衝作用もあり，これからの京都は，ハグロトンボのいる街，とすると良いのではないか。
市民調査に関しては，調査の方法などを検討するための専門家の委員会を作って行うべきである。単に市民が調査をすればいい，データが出ればいいというわけではない。

畠　委　員　市民調査のいいところは，市民が自分のできる範囲で自由に参加できるところである。河川，田んぼ，農地など，身近な環境で，ハイキングや散歩の中で見つけやすい指標をいくつかピックアップして，期間を決めて一斉調査したら良いのではないか。

森 本 委 員　現在のプランの策定時に，鳥の専門家から，鳥についての記載が少ないとの指摘があった。鳥は指標として扱いやすく，環境を整備すると，環境の変化に対して短い期間で反応がみられる。
指標種をどのように決めるか，ブレインストーミングの場を設けるのも良いと思う。

板 倉 委 員　ホタルについては，踏み込んで，ヒメボタル，ヘイケボタルまで調査すればおもしろいのではないか。トンボも良いと思うし，ツバメは都市化の問題との関係もあるので良いと思う。
シンボリックな種を指標にすれば市民にも分かりやすく取り組みやすい。

久 山 委 員　ホタルは哲学の道で随分減っているが,ホタルの生息地として市の登録天然記念物になっている。キマダラルリツバメは京都府の自然２００選に入っている。どちらも指定はしたが,その後どうなっているのかを後追いしていないのではないか。指定されている生きものを追跡する手もあると思う。
府のレッドデータブックでは,極めて身近な生きものが準絶滅寸前種になっていたりするので,ひとつの指標としてレッドデータブック掲載の生きものを見るのも,身近なところではあると思う。

湯本部会長　追跡するのは,非常に大事なことである。京都生きもの１００選をせっかく作ったので,この生きものたちの現況はモニターしていなければならない。この部会でまじめに考えなければならないことの一つである。

原 口 委 員　社寺,歴史や文化のコンテンツは京都しかないので,観光客,海外の人に発信すべきである。日本人,外国人向けに京都のコンテンツを発信しているアプリ,ＨＰ,ガイドブックは山ほどあるため,「京都の社寺と生物多様性」に載っているような情報を,作っている人たちに売りこめば,勝手に拡散させることができる。既存のメディアに乗せた取組は,2020 年までの現行プランでも,まだできるはずである。
京都の生物多様性というコンテンツには価値がある,と各部局に認識してもらえれば,色々な連携ができるのではないか。京都の魅力は生物多様性に支えられた歴史と文化である。

湯本部会長　環境審議会では,各施策を SDGs とどう関連付けるかということが議論の半分だった。「生物多様性の恵みを生かした暮らしや経済活動」という一番難しい目標には,SDGs やグリーンインフラが糸口になる。
地元に根付いた観光（着地型観光),１か所に長く居てもらい資源を味わってもらう観光を目指し,生物多様性は一見関係ないように見えるが,観光施策に転換できる要素はたくさんある。
京都も,持続可能な観光のために,いつまでも同じコンテンツというわけにはいかない。生物多様性は大事なコンテンツである。

喜 馬 委 員　アンケート調査を実施するのであれば,送付だけでなく,大学（大学図書館など）に設置してはどうか。身近な生きもの,希少な生きものには,大学生も興味があるはずである。
また,先日,京都の自然をテーマに観光をする外国人に出会った。市民の関心を高めるだけでなく,海外からの関心を高めていくのも一手だと思う。
紙媒体以外での発信方法にも本格的に取り組むべき。

湯本部会長　環境審議会で,外国人の環境負荷のネガティブな面も見なければと言われているが,「生物多様性の恵みを生かした持続的な暮らしや経済活動が行われている」という目標は,観光抜きには考えられない。

原 口 委 員　事業者向けコンテンツとして,「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」は分かりやすく,パッケージ化されていて,手を出しやすい。成功例だと思う。
ただ,域外での系統保存の次の一手として,森づくりや環境保全などについて前回議論があった。
SDGs にどう取り組むかを検討している京都の上場企業に,市が参加しやすい仕組みを提案するのも良い。上場企業にとって,市と連携してやっている,というのはアピールになる。お金と人手がかかりそうな生息地の保全に関わってもらうこともできる。

湯本部会長　生息地保全をどのように行うかについて,行政がやりやすいのは仲人である。
「場所を提供する人」と「土地はないが何かやりたい人」のマッチングをする際,行政が入ると成立しやすい。あるいは行政でないとできないこともある。

久 山 委 員　「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」について,認定した取組だけで

なく，認定団体にこういう議論に参加してもらえる仕組みを作り，広い意味での京都の生物多様性にどう貢献できるか，どう思うかを考えてもらうよう，もっと呼びかけてもいいのではないか。
例えば，生け花など文化を守っている既存の団体に働きかけていけば，京都らしい戦略が立てていけるのではないか。
外国人観光客は京都では横ばいで，リピーターは郊外へ，地方へ行きたがる。次にどこに行ってもらうかが，観光戦略のキーポイントである。そういった中で，社寺における生物多様性をアピールすることは効果的である。
環境保全，生物多様性保全は杓子定規にやっても進まないので，世間の動きも取り入れながらやっていけば，おもしろいかたちで動いていく。おもしろみがないと若い人も付いていこうと思わない。

森本委員　シカ問題について，大原野森林公園でも防鹿柵を設置しているが，本当は戦略的にシカを捕獲していくべきである。
生物多様性地域戦略でシカをどうするべきか，合意形成を図っていく必要があるのではないか。戦略で全く扱わないのはまずい。

湯本部会長　鳥獣対策は都道府県の管轄である一方，京都市でも重要な課題であるため，市としてどのように取り組むかは今後の課題として検討していきたい。

畠委員　京都市が既存の優れた枠組みに乗っかってまとめていき，成果を１～２つ出すのも良いのではないか。生きものの減少，生息場所の減少については，重要な地域の保全団体に乗っかってひとつの取組を実践する。
名古屋市守山区では，区内の自然保護団体のそれぞれの保護プログラムをスタンプラリー形式で市民に参加してもらい，参加すると守山区の環境のロゴが入った記念品がもらえるといった事業を実施しており，盛況であったと聞いている。参加する市民は，色々な団体のプログラムを知ることができる。市のお墨付きがあるということで，参加しやすいというのもあると思う。

湯本部会長　市の他部局の施策について，今の時代ではそれなりに生物多様性に配慮したものが多いとは思うが，環境管理課が先導して生物多様性に配慮した施策を１～２つ作るのも手である。

喜馬委員　SNS の活用について，話題性が大事なので，自分たちが何かするというよりは，話題性のある人，YouTuber や京都出身のお笑い芸人など，一定のファンを持っている方に協力してもらい，SNS に活用していく，というのをやっていると流れができるはずである。